

## 時代を駆ける：岡部健／3 患者の望み、気付かされ

◇TAKESHI OKABE

《87年、東北大から静岡県立総合病院に転勤した。自身の考えを一変させる患者と出会う》

結核手術で肺機能が低下し、入退院を繰り返していた男性で、当時60代だったと思います。肺結核はシベリア抑留時代からだったそうでした。その頃の私は、東北大で身に着けた最先端の技術を駆使し、患者を一分一秒でも延命させたいと意気込んでいました。男性のどのの気管を切開し、管を取りつけました。たんを吸引できるほか、人工呼吸器にもつなげられるものです。

でも2年たったある日、男性が「もういい」と。「若いあんたが一生懸命やってるから我慢してきた。このままでは家族に迷惑がかかるし、生きている意味がない。管を抜いて自然に逝かせてほしい」と言うのです。「抜いたら死んでしまう」と説得しても、聞き入れてくれなかった。

管がなければ苦しくて考えも変わるだろうと思いましたが、無駄でした。「今なら間に合います」と伝えても、男性は管を再び入れません。数日後に亡くなりました。

本当にショックでした。「我慢していた」なんて、自分の努力は何だったんだろう。患者が望むことと、医師が患者のためと考えることには違いがあると、男性は体を張って教えてくれたんです。医者になり10年目、30代後半のことでした。

《静岡時代、がん告知も初めて経験した》

集団検診で肺がんが見つかった50代の男性から、自分の病気について正確に教えてほしいと請われました。当時は本人に告知はせず、「肺化膿（かのう）症」など偽病名を使うのが一般的でした。東北大にいたときから、一律に偽病名を使うことに疑問を感じていたんです。

男性は「肺化膿症って肺がんのことですか。がんならばっきり診断してください」と言うので、がんの病状を説明しました。

男性には大学受験を控えた息子がいて、がんの診断で学費の援助制度を利用できたと後で聞きました。患者の病気だけでなく、置かれた環境を理解することも大切だと気付きました。この男性は手術が成功し、今でもお茶を贈ってくれます。

=====

聞き手・下桐実雅子 写真・丸山博／火～土曜日掲載です

=====

### ■人物略歴

◇おかべ・たけし

栃木県小山市生まれ。医療法人爽秋会理事長。がん患者の在宅緩和ケアのパイオニア。日本ホスピス緩和ケア協会理事。61歳